

学生の意見から探るリサーチ・クエスチョン (RQ)

— 福井県大学間連携事業 (F レックス) における教学 IR から —

徳野淳子 (福井県立大学)

1. 本発表の目的と課題

中央教育審議会が 2012 年 8 月 28 日に取りまとめた答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」において、「大学が教育情報を用いて自らの活動状況を把握・分析することに活用」と言及されて以来、教学 IR (Institutional Research) の取り組みが活発になっている。

福井県大学間連携事業(通称：F レックス)においても、教学 IR の取り組みとして、大学生の学びや成長に対する意識の変化を捉えるため、2010 年度から学生意識調査を行っている[1]。本取り組みでは、調査の分析結果を各機関の教員に伝え教育改善に利用するだけでなく、記名式で実施した一部の機関においては、学生の自己理解や大学生活の過ごし方の改善に役立ててもらうことを目的に、結果の一部を学生にフィードバックしている[2][3]。

教育改善を目的とした学生意識調査を行う場合、何を明らかにしたいのかという目的を見据え、そのためにどのような調査項目を設定するかを考える必要がある。つまり、RQ(Research Question)を適切に立てることが重要になる。立命館大学における教学 IR の開発[4]では、RQ の作成において、学習や教授に関わる人々が参画することで、機関の現実的な課題に沿ったより適切な RQ が反映された項目設定が可能になると述べられている。

学生意識調査の結果を教員にフィードバックし、教育改善に利用する場合、その RQ の作成に教員との対話が重要になるのと同様に、学生へのフィードバックを通して彼らが自らの学びを見つめ直し、改善につなげる上では、「学生がどのような情報を求めているか」について知る必要がある。本研究では、「どのような情報を学生にフィードバックすることが学びや成長に結びつくのか」を探るため、調査を行った。本稿では、そこで得られた学生の意見から RQ を探る。

2. F レックス学生意識調査

2.1. 調査項目と実施概要

F レックスの学生意識調査は、2010 年に開催した FD 合宿研修において、京都大学 溝上慎一氏に F レックス参加機関の学生を対象に学生意識調査(学修行動調査)を監督、分析して頂いたのを機に、それ以降、毎年継続して調査している。調査項目は、溝上氏の調査項目[5]を踏襲し、一部 F レックスの各機関の実態に合わせて変更しながら、大学生活の過ごし方や身に付いた知識や技能、将来設計、教育満足度、授業への意欲など全 9 間について調査している。詳細は先行研究[1]を参照されたい。これまでの実施概要を表 1 に示す。調査は毎年 1 回、11 月頃に実施している。

表 1 F レックス学生意識調査実施概要

調査年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016
実施方法	無記名式	一部の機関のみ記名式で実施				一部機関を除き記名式で実施
参加機関	3 機関	5 機関 (内 1 つは独自で分析)		5 機関		
回答数(全体)	603	2,739 (*1)	2,796 (*1)	3,131	3,992	4,048

(*1) 独自に分析を行った機関の回答数は含まれない。

2.2. 分析

この調査の分析では、主に「大学生生活の過ごし方 (一週間当たり、どのような活動にどれくらい時間を費やしているか)」の回答から、学生を複数のタイプに分類している。2015 年度の調査から得られた学生タイプを図 1 に示す。図 1 の因子 1~7 は、「大学生生活の過ごし方 (全 18 項目の活動)」の回答データに対し、因子分析を行った結果抽出された 7 つの因子である。この因子得点を用いて、各学生の回答データをクラスター分析 (k 平均法) した結果、分類された 6 群(T1~T6)をグラフ上に学生タイプとして表示している。

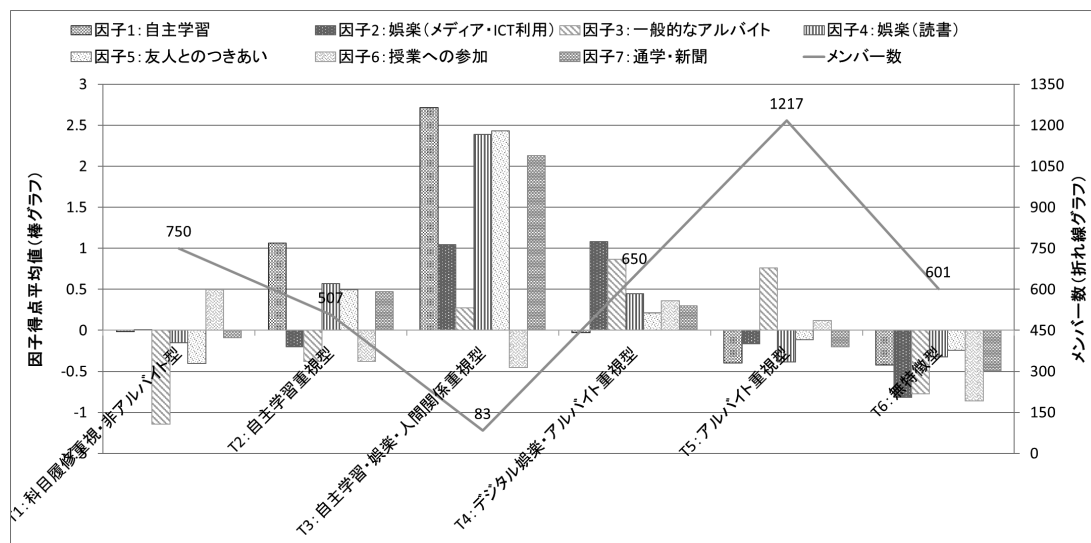


図 1 大学生生活の過ごし方からみた学生タイプ (2015 年度 学生意識調査) ¹

また、「どのような学生タイプが、大学生生活を通じて成長を実感しているか(自己成長感)」についても分析を行っている。自己成長感として 23 項目の知識・技能を設定し、それぞれ授業と授業外活動を通じてどの程度身についたかを尋ねている。2015 年度の結果では、図 1 に示すタイプのうち、「T3：自主学習・娯楽・人間関係重視型」が最も自己成長感が高く、次いで「T2：自主学習重視型」が高いという結果であった。この他、各学生タイプと将来設計の違いなど他の質問項目との関係や、学生の所属機関や学部学科、学年によって各学生タイプの割合がどのように異なるかを比較している。

¹ 学生タイプは年度毎に分析しているため、抽出されるタイプは調査年度によって多少異なる。

2.3. 学生へのフィードバック

記名式で実施した一部の機関においては、前述した「大学生活の過ごし方」から見る学生タイプ、「2つのライフ（将来展望と現状）」、「将来を考え始めた時期」の項目において、各機関の分布とその中で各学生がどこに位置付けられているかという結果を学生にフィードバックしている[2][3]。

3. 学生が求める学びや成長につながる情報の調査

2016年4月に、筆者が所属する福井県立大学の61名の学生（うち1年生が57名、2年生以上が4名）を対象に調査を行った。対象者には、2.で述べたFレックス学生意識調査の目的と概要および、2015年度の調査結果を説明した上で、「学生意識調査アンケートに回答した結果、自分にフィードバックされる情報として、どういった事が知れると嬉しいですか？またそう思う理由を書いて下さい。」という質問をした。

回答者61名のうち、2つ意見を挙げている学生が2名いたため、全体では63件の回答が挙げられた。学生が必要とする情報について、回答の主な分類とその割合を図2に示す。

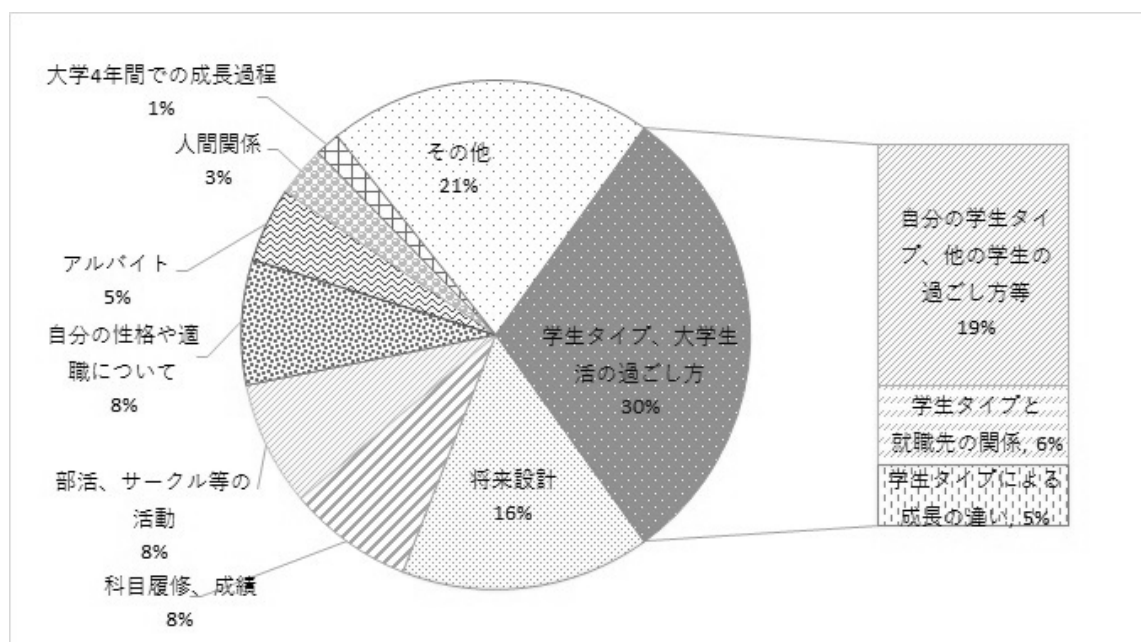


図2 学生から挙げられた意見の分類

今回は、2.で述べた大学生生活の過ごし方から見た学生タイプやそれによる自己成長感の違いなど2015年度の分析結果を説明してから調査を行ったこともあり、「学生タイプ、大学生生活の過ごし方」についての意見が多く見られた。「学生タイプ」に関しては、「自分の学生タイプを知りたい」²という意見や「図1に示す6つの学生タイプよりも詳細な分類を知りたい」「学習、遊び、アルバイトなどでどのくらいのバランスが理想的なのか」とい

² 今回調査に参加した学生は、過去にFレックスの学生意識調査に参加していない1年生が中心であり、まだ自分の学生タイプをフィードバックされていない学生である。

う意見などが挙げられた。また、「所属機関や学科の各学生タイプの割合やその中で自分はどこに位置するのか」、「他の学生がどのような大学生活の過ごし方をしているのか」など周りの学生と比較できる情報を望む声もあった。

加えて、「学生タイプ（大学生活の過ごし方）が就職や成長にどのように関係してくるのか」という意見も見られた。就職に関しては、「自分と似た学生タイプの先輩はどのような職業に就いているのか」や、「学生タイプによって就職先も異なるのか」などの意見が、成長に関しては、「自己成長感を得た学生の生活に比べて自分はどうか」、「自分の学生タイプが成長するためには何をすればいいか」という意見が挙げられた。総じて、学生が現在の大学生活の過ごし方がこのままでいいのか不安や疑問に思っている様子が確認された。

次に回答が多かった「将来設計」に関しては、まだ将来設計を立てていないという学生からの意見が多く、「他の学生はいつ頃から将来を意識するのか」、「何をきっかけに考え始めたのか」、「同じ学科の学生は将来どのような職業に就きたいのか」、「先輩が大学 1 年生の時に、自分の将来についてどのようなことを考えていたか」などを知りたいという意見が挙げられた。その理由として、将来設計を持っていないことへの不安、他の学生の状況を知ることで、一緒に頑張ろうという意欲が生まれるという回答が目立った。

この他、「科目履修、成績」、「部活、サークル等の活動」について、「他の学生はどのような授業を履修しているのか」、「勉強方法と成績との関係」、「部活やサークルに入る人の割合」など、現在の F レックスの学生意識調査で調査していない情報を望む声もあった。これについては、今回主な回答者が大学 1 年生であったことや調査を実施した時期が 4 月であったことが影響して、新入生が大学生活を送る上でこの時期にこれらの情報を必要としていることが推測される。

以上の意見を踏まえると、今回の調査で見えてきた RQ としては、

- (1) 大学生(特に自分の所属する学部学科の学生)はどのような過ごし方をしているのか。
- (2) どのような大学生活の過ごし方が成長につながるのか。成長するためには、各活動、時間の使い方をどのように見直していけばよいのか。
- (3) 大学生活の過ごし方と進路の関係。各職業に就いた先輩が、在学時にどのような大学生活の過ごし方をしていたのか。
- (4) 大学生(特に自分の所属する学部学科、同一学年)の将来展望と現状、将来を考え始める時期とそのきっかけ
- (5) 新入生はどのような情報を参考に、大学での学びや活動スタイル(時間割の作成、勉強方法、サークルや部活、アルバイトに取り組むか否か等)を決めているのか。

(1)(2)は、学生意識調査でも既に RQ に設定しており、(1)については、これまでも各自の学生タイプと所属機関の分布を一部の機関において学生にフィードバックしてきた。しかし、学生の意見を踏まえると、学生タイプという漠然とした指標だけではなく、より具体的に、同輩や先輩が各活動にどれくらい時間を費やしているかという情報も必要としていることが分かる。また、(2)については、2. で述べた通り、2015 年度 F レックスの学生意識調査の結果、「T3 自己学習・娯楽・人間関係重視型」の活動的な学生の自己成長感が高いことが確認されている。しかし、これ以外のタイプの学生も含めて、個々の学生タ

イブが成長していくにはどうすべきかという情報が求められている。これについては、各活動と自己成長感の関係や学生タイプが学年によってどのように変わっていくのかなど経年変化についても分析を行い、大学生活の過ごし方を見直す上で参考になる情報を提供していきたいと考えている。

(3)は現在、F レックスの教学 IR 活動では実施していない項目である。卒業生の在学時の過ごし方は、過去の調査から分析可能であるが、それと進路との情報を関連付けるためには、キャリアセンター等との連携が必要である。また、(4)に関しては、これまでも「2つのライフ(将来展望と現状)」、「将来を考え始めた時期」に関する情報はフィードバックしてきたが、学生からは「統計データではなく、卒業生の具体的な体験談が聞きたい」などロールモデルを求める声もあり、学生にフィードバックする情報を見直していく必要がある。

最後に、(5)は新入生の多くが入学時に抱える疑問である。「数ある選択科目の中からどれを履修するか」や「どのような部活やサークルに入るか」ということを決める際に、新入生ガイダンスやサークル紹介等で教員や先輩から聞く情報だけでは、十分ではないと感じている学生もいるようである。特に、科目履修に関しては、新入生ガイダンスや履修指導等が適切に機能しているかという視点からも確認していく必要がある。

4. おわりに

調査を通して、学生が自分の学びを見直し、改善につなげる上で必要とする情報について様々な意見が挙げられた。その回答から見えてきた RQ の中には、これまで設定していたものもあったが、学生が望むような内容でフィードバックできていない項目があることも分かった。

また、今回の調査では、回答者の学年や調査の実施時期などが関係している意見も見られた。フィードバックする内容だけではなく、各学生がどのような時期にどのような情報を必要としているかも踏まえて見直し、学生へのフィードバックの効果を高めていきたい。

謝辞

学生意識調査および今回実施した調査にご協力頂いた F レックス IR-WG、FD チーム、各参加機関の先生方、学生の皆さんに感謝します。

【参考文献】

- [1] 徳野淳子, 田中洋一, 杉原一臣, 山川修, “福井県大学間連携事業(F レックス)で進める学生意識調査の5年間の歩み”, 第5回大学情報・機関調査研究会, pp.22-27, 2016.
- [2] 田中洋一, 平塚紘一郎, 入澤学, 山川修, “学生意識調査フィードバックシステムの構築—F レックスにおける教学 IR—”, 仁愛女子短期大学研究紀要第46号, pp.17-22, 2014.
- [3] 田中洋一, 徳野淳子, 山川修, 平塚紘一郎, “学生意識調査のフィードバック—大学連携による教学 IR—”, 大学教育学会第37回, 2015.
- [4] 鳥居朋子, “特集 立命館大学における教学 IR の開発の現状と展望: IR プロジェクトの歩みとリサーチ・クエスチョンを通して”, 立命館高等教育研究第15号, pp.37-53,

2015.

- [5] 溝上慎一, “「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す—”, 京都大学高等教育研究第 15 号, pp.107-118, 2009.